

自信と誇りを取り戻す 町の取り組みを伝えたい

徳島の山中にあり、人口は約2000人で2人に1人が高齢者と聞けば、活力を失った典型的な過疎地を想像するのも無理はない。しかし、この上勝町は高齢者を中心とした事業で活力を取り戻し国内外から注目されている。その秘訣を探るべく、JICA研修員が地球の裏側からやって来た。



いろいろ発信する市場の価格情報や月間の売り上げをインターネットで確認する、生産農家の一人、高橋幸子さん。高齢者でも使いやすいよう、マウスやソフトウェアも工夫されており、町全域には光ファイバーが整備されている

葉っぱが一大ビジネスに

徳島駅からバスで約1時間半。勝浦川上流の山あいには佇む徳島県勝浦郡上勝町。「葉っぱで2億円以上を稼ぐおばあちゃんたち」のフレーズで知られ、地域活性化の成功例として名高い。

原動力となったのは、町の第三セクター、「株式会社いろいろどり」による、和食の装飾に使う木の葉や花の枝などの、「つまもの」ビジネスだ。「彩」のブランドで売られ、今では全国の



つまもの市場の7割以上を占め、年間売上高は2億5000万円に上る。栽培される商品は色、つや、形、大きさなどの品質管理が徹底されており、高級料亭や旅館が主な取引先だ。いろいろどりは商品企画やマーケティングを行い、商品を精詰めし農協に納品する生産者をサポートする。町の農家の40%近く(約200軒)が、四季を通じて300種類以上のつまものを生産しているが、多くは60〜70代の女性たちだ。中には月間の売り上げが100万円に達する生産者も。

上勝町にはいろいろどりのほか、シイタケと菌床の生産事業、間伐材を燃料利用する木質バイオマス事業などを行う5つの第三セクター企業がある。



青もみじや梅の柱の出荷作業を行う高橋さん。今年82歳になる。JICAを含む海外からの視察も多く「注目され、頑張らないかん」と励みに思う」と元気に語る

また、固形ごみの分別収集によるリサイクルの先進事例で注目を集めるほか、古くからの棚田を守るためのオーナー制度の導入など、環境問題に着目した数々の地域振興策を打ち出している。

資源に気付き、資源を生かす

3月10〜12日、JICA大阪によるペルー国別研修「自治体における地域振興事例紹介」の6人の研修員がこの町を訪れた。彼らは主に地方自治体などで地域開発や産業振興に携わる首長や管理職だ。3月5日から3週間にわたり実施された同研修で、日本の地域振興事例や人々



町の第三セクターの一つ、「株式会社もくさん」は、住宅資材販売のほか、間伐材をチップ化して温泉施設の湯沸かしに利用するなど、町の森林資源活用の一翼を担っている



2020年までにごみを無くす「ゼロウェイスト宣言」を日本で最初に掲げた上勝町。町の施設に人々が自主的にごみを持ち込み、34種にも及ぶ分別を行う。町でごみ収集車が見られることもない

の経験を学び、各自の地域振興プロジェクトを見直し、新たな地域活性化のヒントを得ることを目的とする。今回、4つの地域振興事例の一つとして、上勝町を視察した。

「地域に眠る資源に気付きそれをどう生かすか。これに尽きる」と話すのは、20年以上前に農協でつまものビジネスを立ち上げ、第三セクターとなった今も市場分析や現場の管理を一手に引き受ける横石知二。いろいろどり副社長。林業とミカン栽培で細々と生計を立て過疎化が進行していたこの町で、「葉っぱが売れるわけない」という大方の予想の中、苦勞に苦勞を重ねて事業を育て、町の活性化に貢献してきた。

「いろいろどりで農家の女性がとても元気になった。『前よりも80歳を超えた今のほうが賢くなった』と言う人もいます。自分で育てた商品が売れることで、上勝の真実に気付き、誇りを取り戻したのです。途上国にも、資源を生かして工夫を重ね、人や地域が元気になる事例が少しでも多く広がってほしい」

研修員のトーマス・ピリエガスさんは、「高齢者がはつらつと働く姿が素晴らしい。またこの小さな町が、環境問題など地球レベルの課題にまで考えを広げ行動している。『驚き』の一言だ」。グアダルルーベ市長のエリック・コステイラさんも「横石さんのような優れたリーダーのもと、人々が地域の誇りを取り戻そうと地道に努力してきた点に感銘を受けた。自分の目下のプロジェクトは固形ごみの分別収集だが、将来的にはセラミックを生かした陶器産業を興し、市民が意欲的に取り組める振興策も考えたい」と話す。

高齢化率は県内最高の49%という上勝町では、多くの住民が生産現役で、寝たきりの人はほとんどいないそうだ。「遠い外国からたくさんの方が足を運んでくれ、町の人間の自信と誇りになっている」(横石さん)こともきくと大きく関係しているに違いない。